

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**大学院学生研究**  
**2017年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
<b>研究代表者</b> (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	長井 悠稀 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	森 聡美 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	日英バイリンガル幼児の主語項選択における言語間相互作用－インプット効果の検証－		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	長井 悠稀	
<b>研究期間</b>	2017 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 96,848 円 / (採択金額) 100,000 円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、日英バイリンガル幼児の日本語と英語での主語項産出において言語間相互作用(Cross-linguistic influence, 以下 CLI)が見られるか、また幼児の主語使用は対話者の傾向に起因するのかを明らかにすることを目的とした。分析の結果、英語から日本語への一方向でのみ CLI が観察された。また、インプットは CLI に関係しないことが明らかとなり、バイリンガル幼児における CLI は、インプットに関係なく言語内要因(統語・語用インターフェイス、構造の部分的重複)により生じることが示唆された。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 言語間相互作用 } { 同時バイリンガル幼児 } { インプット }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究背景】**

バイリンガルの第一言語習得領域における多くの先行研究において、言語間相互作用(Cross-linguistic influence, 以下 CLI)は統語・語用インターフェイスに関わり(インターフェイス仮説: Sorace & Filiaci, 2006)、表層構造に部分的重複がある構造で生じうる(曖昧性仮説: Hulk & Muller, 2000)という提唱の検証がなされてきた。先行研究による結果は一貫しており、単数の選択肢を持つ言語が複数の選択肢を持つ言語のうち重複する方をより強めるということが報告されている。さらに近年、統語・語用インターフェイスや構造の重複以外の要因は CLI を説明可能であるかという点についての詳細な検証がなされてきている。その中でもインプットは言語外要因の一つであるが、特にインプットの質(ここではインプット内の構造を指す)に焦点を当て CLI との関係性を検討している研究はごく少数に限られている(Paradis & Navarro, 2003; Mishina-Mori et al., 2015)。本研究は、日英バイリンガル幼児を対象とし、日本語と英語での主語項産出において CLI が見られるか、またバイリンガル幼児の主語使用は対話者の傾向に起因するのかを明らかにすることを目的とした。

日本語と英語における主語項選択は、CLI が生じうる条件であるインターフェイスと構造の部分的重複の両方を満たす構造である。日本語では、主語は明示あるいは脱落の形式を取るが、形式の選択は談話・語用的コンテキスト(新情報、質問、強調、対比、不在)に依拠する。一方、英語では、談話・語用的コンテキストに関わらず、原則的に明示主語の使用が求められる。したがって、日英の主語項選択において、CLI は明示の選択肢のみを持つ英語が明示・脱落という複数の選択肢を持つ日本語のうち、重複している明示の選択肢を強めることが予測できる。つまり、日英バイリンガル幼児は日本語において、談話・語用的に不必要なコンテキストで明示主語を過剰に使用することが期待される。

**【研究課題】**

1. 言語内要因(インターフェイス、表層構造の部分的重複)は日英バイリンガルの主語項選択における CLI を説明可能か
2. インプットの質は上記の CLI を説明可能か

**【研究方法】**

データ: CHILDES(MacWhinney, 2000)で公開されている以下の自然発話データを使用した: 1歳11ヶ月から2歳7ヶ月の日英同時バイリンガル幼児一人(Ota, 1998)、年齢、平均発話長(Mean Length of Utterances, 以下 MLU)が同程度の日本語モノリンガル幼児二人(Miyata, 1995)、英語モノリンガル幼児二人(Brown, 1973)。バイリンガル幼児の二言語能力のバランスは、分析データ内から得られた各言語の異なり語彙と MLU に基づき均衡であると判断された。

コーディング: 動詞を含む発話内の主語を分析対象とし、以下の3項目でコーディングを行った。

- a. 言語学的特徴: 形式(脱落/語彙/代名詞/指示詞)、人称(1/2/3 人称)
- b. 談話・語用的特徴: 新情報、質問、強調、対比、不在
- c. 幼児語としての特徴: ターン(Initiation/Response)、幼児語機能(確認/反復/意味的関連)

**【結果】**

研究課題 1: バイリンガル幼児の主語使用において、英語から日本語へ一方向での CLI が観察された。しかし、それは談話・語用的コンテキストを考慮した分析時に限られていた。つまり、総体として、バイリンガル幼児は両言語においてモノリンガルと類似した明示・脱落主語の使用頻度を示したが、日本語においては談話・語用的に不適切なコンテキストで明示主語を使用する頻度がモノリンガルよりも高かった。

**研究成果の概要 つづき**

研究課題 2:日英バイリンガルである対話者と幼児の日本語における不要な明示主語の割合が大きく異なっていることから、インプットは CLI を引き起こす要因ではないことが示唆された。さらに、バイリンガル対話者は、モノリンガルと同様に談話・語用的に適切なコンテクストあるいは幼児語の機能として明示主語を使用していることから、バイリンガル対話者の日本語は英語による影響を受けていないことが確認された。

**【考察】**

研究課題 1:研究課題 1に関する分析結果は、インターフェイス仮説と曖昧性仮説を支持している。しかしながら、バイリンガル幼児は談話・語用的コンテクストを考慮した時のみ不必要な明示主語を過剰使用したという結果から、CLIの強度は比較的弱いと判断できる。この傾向は、言語間距離が離れた言語ペアを対象とした先行研究(Hacohen & Schaeffer, 2007; Mishina-Mori et al., 2015)の結果と一致している。日英の言語間距離による主語の統語構造や脱落主語の修復システムの違いが、日英バイリンガル幼児において観察された CLI の傾向に起因していると考えられる。

研究課題 2:研究課題 2に関する分析結果から、対話者から幼児へのインプットを介した言語構造の転移という可能性はないことが示された。したがって、日英バイリンガル幼児の主語項選択における CLI は、言語外要因であるインプットに起因するのではなく、言語内要因(統語・語用インターフェイス、構造の部分的重複)により生じることが示唆された。

## 参考文献

- Brown, R. (1973). *A first language: The early stages*. Cambridge, UK: Harvard University Press.
- Hacohen, A., & Schaeffer, J. (2007). Subject realization in early Hebrew/English bilingual acquisition: The role of crosslinguistic influence. *Bilingual: Language and Cognition*, 10(3), 333.
- Hulk, A., & Müller, N. (2000). Bilingual first language acquisition at the interface between syntax and pragmatics. *Bilingualism: Language and Cognition*, 3(3), 227-244.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk* (2nd ed.). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Mishina-Mori, S., Matsuoka, K. & Sugioka, Y. (2015). Cross-linguistic influence at the syntax-pragmatics interface in Japanese/English bilingual first language acquisition. *Studies in Language Science: Journal of the Japanese Society for Science*, 14, 59-82.
- Miyata, S. (1995). The Aki Corpus. Longitudinal Speech Data of a Japanese Boy aged 1.6-2.12. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College No.34*, 183-191.
- Paradis, J., & Navarro, S. (2003). Subject realization and crosslinguistic interference in the bilingual acquisition of Spanish and English: What is the role of the input?. *Journal of Child Language*, 30(2), 371-393.
- Sorace, A. & Filiaci, F. (2006). *Anaphora resolution in near-native speakers of Italian*. *Second Language Research*, 22, 339-368.

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 雑誌論文**

なし

**② 図書**

なし

**③ シンポジウム・講演会等の開催**

なし

**④ その他**

長井悠稀 (2017年10月7日)。「日英バイリンガル幼児の主語項選択における言語間相互作用－インプット効果の検証－」第16回第1言語としてのバイリンガリズム研究会.立教大学池袋キャンパス.